

住民の自伝的記憶から読み解く地域の風景 —新潟市佐潟を対象に—

安達 幸輝¹・福井 恒明²

¹学生会員 法政大学大学院修士課程 デザイン工学研究科 都市環境デザイン工学専攻
(〒102-8160 東京都千代田区富士見2-17-1, Email:koki.adachi.2j@stu.hosei.ac.jp)

²正会員 法政大学教授 デザイン工学部 都市環境デザイン工学科
(〒102-8160 東京都千代田区富士見2-17-1, Email:fukui@hosei.ac.jp)

近年、住民参加型のまちづくりへの需要が高まっている。まちづくりの議論の場では、自分の地域に対する自伝的記憶が他者に共有されるため、自分達のまちのアイデンティティを見つける機会となる。本研究では、新潟市の佐潟における住民の自伝的記憶に着目し、住民の自伝的記憶から地域景観を読み解き風景の持つ意味を議論した。具体的には、会誌「越後赤塚」に掲載される住民の赤塚地域に対する自伝的記憶が形成された内容、時期、場所について整理した。これを踏まえ、住民の自伝的記憶から地域景観を議論できる可能性について言及した。

キーワード: 自伝的記憶, 風景, 潟, 佐潟, まちづくり

1. はじめに

(1) 研究背景

a) 住民の自伝的記憶から地域景観を考えることの需要

近年、住民参加型のまちづくりへの需要が高まっている。景観計画の策定やまちづくりの議論の場では、地域住民が認識する風景を把握し、住民の目線から計画を練ることを目的とするワークショップが各所で開かれる。そこでは、地域の人々は何を大切にしているか、地域に対してどのようなイメージを持っているか、未来のまちの姿がどうあるべきかなど、その地域の景観に対する価値がコミュニティ内で共有される¹⁾。

ここで、ワークショップなどを機会にどのような価値が共有されているのか考えたい。例えば、同じ風景を眺めた人間が複数いるとする。「眺めは内的システムを経た主観性の強い現象であるから、外部環境が共通であっても、その眺めは人によって異なる。」²⁾とあるように、人の感性は千差万別であるため、皆が同じ風景を眺めたとしても人はそれぞれに違う風景を認識する。つまり、人が持つ風景感覚は多様であり、それは各々の趣味嗜好により左右されるため、風景に対して抱く価値は人によって異なるといえる。

では、人は風景を眺めてどのような感覚を抱くのであろうか。「ふるさと」という言葉があるが、人は誰もがどこかの土地の風景に対する思い入れがあるはずだ。風景を形作る畑や山、集落などそれぞれの場所には人間が

その場所で培ってきた営みの歴史がある³⁾。風景の中で培われた経験は、「思い出」と呼べるような個人的記憶となり、「わたし」が持つその土地の風景感覚として保存される。認知心理学では、自分が過去に経験した「思い出」と呼べるような記憶は「自伝的記憶」と呼ばれる⁴⁾。つまり、まちづくりの議論の場で行われる地域の景観に対する価値の共有は、自分がこれまで経験してきた風景に対する自伝的記憶を他者に発信することにより、自分達のまちのアイデンティティを見つける機会となると解釈できるのではないか。すなわち、住民主体に移行しつつあるこれからのまちづくりには、地域に対する住民の記憶から地域景観を読み解き風景の持つ意味を議論することが求められるのではなかろうか。

b) 潟と人の関わりの希薄化

日本では、水田を中心とした農地を拡張することが地域の生産性向上、すなわち経済成長と人口増加に直結していた時代が何百年と続いてきた。そのため湿地や湖沼は干拓の対象となり、埋め立てられてきたが、一定の湖沼は地域の水系インフラとしての機能および多様な生物資源の獲得の場として残されてきた⁵⁾。

新潟県の越後平野には、「潟」と呼ばれる湿地、湖沼が点在する。かつては大小の潟が多く存在したが、その多くは近世以降の新田開発で干拓され、2018(平成30)年現在、新潟市内には16ヶ所の潟が現存する⁶⁾。昭和中期までの潟端に住む住民は、潟と密接に関わり、調整池

や水源、潟の産物の有効利用などを通して、地域の財産として潟を保全しながら利用してきた。しかし、こうした存在価値は高度成長期による生活様式や産業構造の変化に伴い失われ、人と潟との関わりが大きく変容した⁸⁾。近年では、新潟市のアイデンティティを議論する過程で潟に注目が集まり、その現代的価値を見出す取り組みが進んでいる。具体的には、佐潟のラムサール条約登録（1996（平成8）年）、ビュー福島潟開館（1997（平成9）年）、鳥屋野潟湖畔にビッグスワン建設（2001（平成13）年）、潟の調査・研究を行う潟環境研究所の設置（2014（平成26）年）などを契機として、市民の潟への関心が寄せられたことにより、潟の現代的価値を見出す取り組みが行われる。

(2) 研究目的

これまで述べてきた背景に基づき、本研究は地域住民の自伝的記憶から地域景観への認識を読み解くことを目標とする。

そのために、本研究の目的は、新潟県新潟市西区佐潟の周辺住民の自伝的記憶を対象とし、個人に内包される体験・記憶を構成する要素と要素の関係を明らかにすることで、時代ごとに変容する地域社会の中で様々な主体がどのように風景を認識し、コミュニティの中でどのような風景が共有されてきたのかを把握することとする。

具体的には、会誌「越後赤塚」¹⁷⁻²⁰⁾に掲載される住民の地域に対する自伝的記憶を整理し、住民の自伝的記憶から地域景観を読み解いて風景の持つ意味を議論することを試みる。会誌「越後赤塚」は、「赤塚郷土研究会」より出版され、佐潟や周辺集落と関わりのある人物が執筆した当地における自然や歴史、文化、言い伝え、人物などに関するエッセイが掲載される出版物である。1982（昭和57）年に創刊され、2018（平成30）年に至るまで計29巻が出版された。個人の風景体験や思い出に関するエッセイが多く投稿され、故人による現在では聞き取ることでできない内容が確認できるため、住民の自伝的記憶を把握できる資料である。

(3) 既存研究

地域住民のまちに対する記憶に着目した研究にはかなりの蓄積がある。

地域に対する住民の記憶の時代による傾向や記憶の共有範囲について考察した研究として、永井ら⁹⁾は大分県竹田市を対象に、住民が街の同一性を認識する体系が記憶によって支えられていることを示し、対象地以外でもまちの同一性を住民の記憶の観点から議論できることを示唆した。

住民に共有される地域イメージの伝承行為に着目した

研究として、上井ら¹⁰⁾は東京スカイツリー周辺地域の生活者がもつ下町像を世代別に明らかにした。山口ら¹¹⁾は思い出に配慮したまちづくりの一例として、建物の概観を保持し機能を転用する事例を取り上げ、居住者の思い出は外観のみに依拠しているとは限らないとして批判した。その上で、住工混在地域を対象に、住民のまちに対する思い出を把握した。

また、個人や組織の経験を記録し後世に伝える手法としてオーラル・ヒストリー¹²⁾がある。これは、歴史資料としてばかりでなく、意思決定のケーススタディーとしても利用価値が高い。景観やまちづくりの分野では後藤ら¹³⁾によるまちづくりオーラル・ヒストリーがあり、住民の生活史や記憶はまちづくりに応用できるとした。

以上のように、地域住民に共有される記憶を把握し、まちづくりに転用しようとする研究は存在する。しかし、住民の自伝的記憶から地域景観を読み解いて風景の持つ意味を議論することを目的とした論は見られない。

2. 対象地の概要

佐潟は新潟県西区に位置し、上流側の小さな上潟（うわかた）と下流側の大きな下潟（したかた）の、大小2つの潟から成り立つ淡水湖である。河川流入はなく、潟の水源は周囲の砂丘からの湧水である。排水は、下潟の東端にある水門から荒江（あらいど）と呼ばれる排水路に放出される。佐潟の北側には、新潟砂丘と呼ばれる日本最長級の海岸砂丘地形が広がり、江戸時代からスイカ・タバコ・大根の栽培が盛んに行われてきた。

また、佐潟は古くからハクチョウを中心とした水鳥の優れた越冬地として知られ、1996（平成8）年には周辺を含めた76haが、日本で10番目のラムサール条約登録湿地に指定された¹⁴⁾。



図-1 佐潟周辺地図

(国土地理院基盤地図情報より筆者作成)

日本各地の湿地や湖沼と人々との関係が、高度成長期を経て大きく変容したことは先述したが、佐潟においても同様のことが言える。そこで、佐潟を取り巻く歴史的背景を概観し、佐潟と人々の関わりの変遷を整理した^{8) 15)16)}。

①戦前まで（～1940年ごろ）

戦前までの佐潟は、稲作・漁業・狩猟・蓮根栽培といった、周辺住民にとって重要な生業の場であった。

佐潟周辺の赤塚地域では、農業をはじめとした全ての用水に佐潟の水を利用してきた。その中で、潟の貯水機能を低下させないための行為として、湖底に溜まった泥や枯れた水草を取り除く一斉清掃が、夏の水枯れ時に住民総出で行われていた。これは「普請」と称され、佐潟の貯水量や水質を確保するばかりでなく、放流した稚魚の成長など漁業にとっても不可欠であった。

また、佐潟の岸边には明治時代以前から稲作が行われており、田園風景が広がっていた。3月上旬から5月下旬には「ごみ上げ」と称し、個人で佐潟の水底に沈む腐った水草や泥を舟にすくい上げ、それを稲作の肥料として利用していた。

以上のように、戦前までの佐潟では、住民が主体的に潟の環境を維持管理し、その恩恵を受け取る行為が見られることから、潟と人の生業が密接に結び付いていたといえる。

②農業近代化期（1940、1950年代）

戦後には赤塚漁業協同組合が結成され、佐潟にコイ・フナ・ウナギを稚魚放流し、漁業を行っていた。周辺砂丘地の畑地では、干ばつによる大きな被害をしばしば受けていたが、1962（昭和37）年頃、佐潟の水を散水するスプリンクラーが導入されると、安定した農作物の収穫が得られるようになった。

このように、1960年代までの佐潟は農業用水池や淡水魚の良好な漁場として人々の生活に欠かせない存在であった。

③潟での生産の減退期（1960、1970年代）

1960年代の高度経済成長期から社会環境が変化し、潟の恩恵を必要としない生活様式が地域に広がった。周辺砂丘が耕地に変わり、豊かな起伏を有していた新潟砂丘は平坦な農地に整理された。1969（昭和44）年以降に実施された減反政策を機に、岸边の水田が減少した。1982（昭和57）年に西川を水源とする赤塚揚水機場が完成してからは、佐潟が灌漑用水地として機能することはほとんどなくなった。これにより、「普請」や「ごみ上げ」といった住民主体の佐潟の維持管理行為は消失した。

④人と潟との関係再構築期（1980年以降）

1983（昭和58）年からは新潟市による佐潟公園の整備事業が実施され、佐潟の一部は駐車場の用地として埋め立てられた。その結果、昭和から平成にかけて地域住民による潟の利用は、漁猟とわずかな農業用水の利用に留まり、水田だった岸边もヨシ原に変わった。また、1998（平成10）年ごろ、下潟の出口にある水門が、潟の水を湖底まで完全に排水できない形式に改築された。このため、枯死した水生植物は浚渫されることなく堆積し、佐潟の水面は狭くなっていった。

1996（平成8）年に佐潟がラムサール条約に登録されたことにより佐潟の存在や価値が再注目され、佐潟の環境悪化が問題視されるようになった。これに対して地元住民たちは、「佐潟クリーンアップ実行委員会」を結成し、佐潟の浚渫を開始した。こうした活動は、かつての「普請」を現代的にアレンジし、その文化的価値を後世に継承するものとして、「潟普請」と命名された。浚渫は部分的に行われるため水質改善までの影響力を持たないが、現代的な潟の価値を見直す象徴的な行為として位置づけられる。

このように、1980年代の佐潟では、潟と人との関わりが高度成長期による生活様式や産業構造の変化に伴い失われたが、1996（平成8）年のラムサール条約登録を契機として佐潟の存在が再注目され、潟の現代的な価値を見出す取り組みが行われるようになった。

3. 文献調査

(1) 自伝的記憶の抽出

会誌「越後赤塚」に掲載された内容から、①佐潟や周辺集落と関わりのある主体の地域に対する自伝的記憶の内容、②その時の主体の年齢、③西暦（不明な場合はおおよその年代）、④その自伝的記憶が形成された場所を抽出した。自伝的記憶の抽出例を図-2に示す。

『私達子供の頃は、暴風の為の竹藪が佐潟の道路添えに続いていました。又田植えの頃になると、佐潟は水田の用水として満水にするんですが、やがて鮎などが産卵期になると、その藪の中に沢山、それも大きな鮎で、つかみどり出きるんで楽しかった。』³⁰⁾

内容：風景、遊び
場所：佐潟
時期：幼少期として抽出。

図-2 自伝的記憶抽出の例

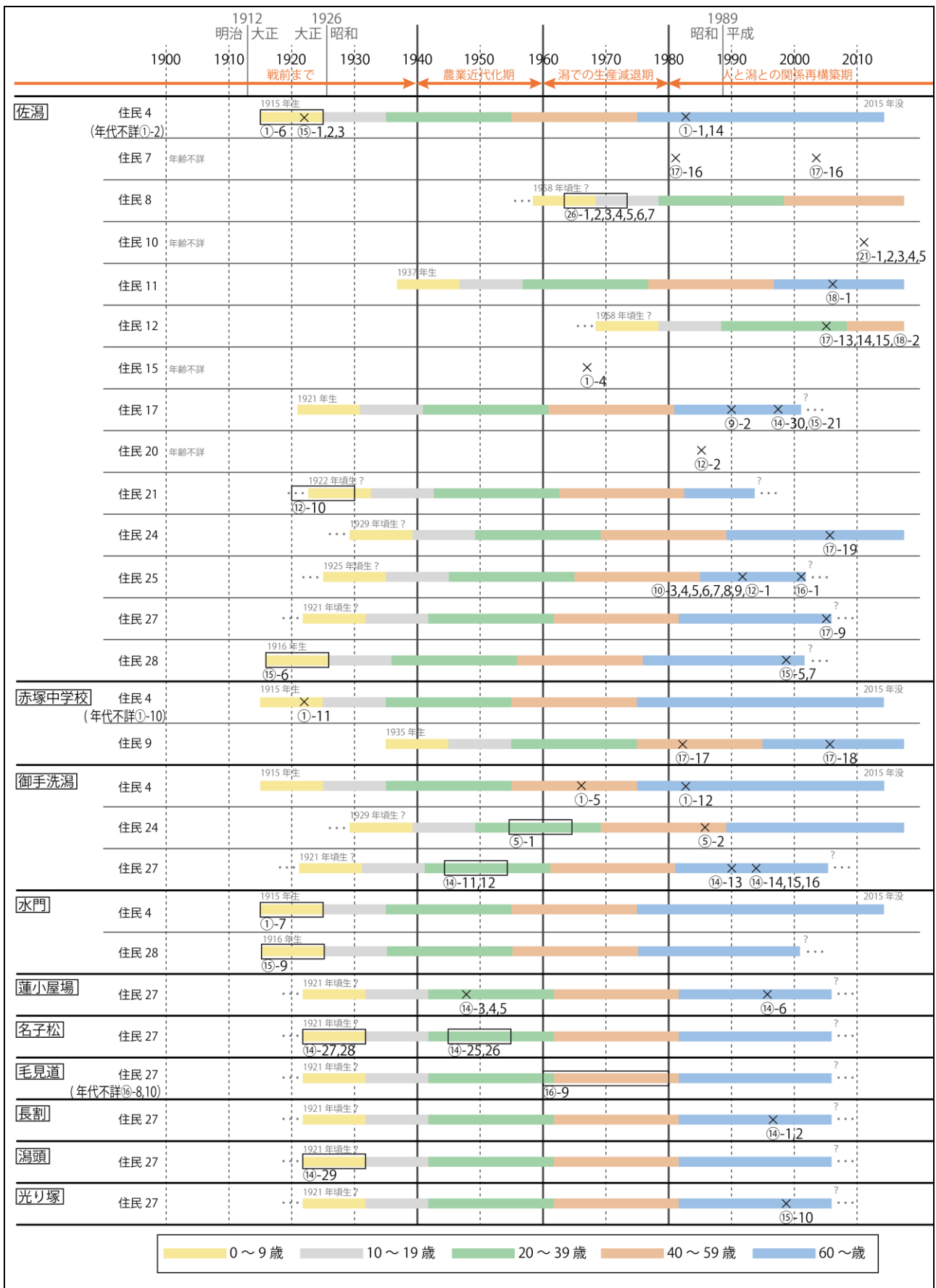


図-5 佐潟周辺に対する住民の自伝的記憶分布図

表-1 戦前までにおける佐潟に対する自伝的記憶 (抜粋)

No.	内容	分類
①-7	佐潟の水門を越える。昔はこゝから鰻が沢山下って、網をあてゝ、鰻をとったものだ。秋の闇夜の晩、雨と風の時には大漁だった。	【遊び】
①-11	こゝは昔、日清・日露の戦没者の碑の建っていたところ、碑は私が子供の頃に赤塚神社に移されて、真中が芝になり、廻りが雑木林になっていて、春は芽の子をとったり、秋は雑木林で、どんぐりの実など拾って遊んだ思い出がある。	【風景】 【遊び】
⑯-1	私が子供の頃、佐潟に蓮根が沢山採れた。殊に上潟の蓮はみごとなものだった。	【風景】
⑯-2	九月頃になると蓮掘りが始まる。蓮ぬぎ人夫と言って、蓮掘りする人が十人以上もいたと思ふ、皆それぞれ船を持っていて、舟に乗って上潟まで行き、夕方掘った蓮を舟に積んで道小屋に来て、目方を計って引渡すのだった。	【風景】 【生業】
⑯-9	また、晩秋の頃に天候が荒れると、佐潟のウナギが、潟の水門から下るんですね。水門につけた網袋に、ウナギや鮎などが沢山入るんです。そのウナギや鮎を水揚げするのを見ることも楽しいことだった。	【風景】

表-2 農業近代化期における佐潟に対する自伝的記憶 (抜粋)

No.	内容	分類
⑤-1	水源は砂丘地の地下水が湧出するもので、昭和30年代じゅん菜とりが行われ、田舟の約半分の長さをもつ専用の小舟を操る風景が見られた。	【風景】 【生業】
⑭-11	そして昭和三十年代までは、長閑に小舟を浮かべてじゅん菜とり姿が見られた。古代には船江神社へ参詣のおり、心身を清めた潟である。この潟の名こそは全国に誇りとすべきものとする。	【風景】 【生業】

表-3 潟での生産減退期における佐潟に対する自伝的記憶 (抜粋)

No.	内容	分類
①-4	其の頃の佐潟は、近所の人達の生活の場所で、金も沢山に入っただけでも、支払った金も多かったとき、頑丈な木の壺に錠前がついていて米が五斗入り、それが売上げの金を入れて運んだとか、又じゅんさい桶と云って二斗程入る随円形の桶も今まだ残っている。	【生業】
①-5	御手洗のじゅんさいも、近所の力カ達が小舟に乗って御手洗に出て、夕方じゅんさい桶を持って岸に待っていると、舟から降りて、じゅんさいを柁に計って、一升いくらかの値段で、金を受取って帰って行った。夕暮時なので、子供心に其の人達の後姿が淋びしさうに見えて、今でも忘れられない。	【風景】 【生業】
⑯-9	米の減反政策が実施されてからは、次第に田圃の埋立てが進み、附近一帯は畑地となった。また更に食堂が、保育園が、民家が出来た。街道沿いの荒江は埋められ、篠竹も松並木も無くなった。	【風景】
⑳-1	当時の佐潟の水は澄みきっていたのだと思います。	【風景】
⑳-4	夏には水門の下は天然のプールに変わり、子供らの水遊び場であり、水泳を覚える場所でもあった。今は異なり、水路は広く長さはかなりあり、底は砂でも両側はコンクリートで固められており、いくら遊び泳いで水が濁っても、佐潟からの水で濁った水は流され常に澄んだ消い水の中で遊ばれ、泳がれた。	【風景】 【遊び】
⑳-6	あの満々と水を溜えた湖面も水深は五十〜三十mまでになっており、あちこちに「とっこう」の漁師たちの潟舟が六〜七艘見えて、とっこう漁が始まっていた。秋の潟の水は一層澄みきっており、「とっこう」という特種の漁法である。	【風景】 【生業】

表-4 人と潟の関係再構築期における佐潟に対する自伝的記憶 (抜粋)

No.	内容	分類
①-14	佐潟もまわりの都市化が進み、自然がだんだんに破滅されて行く。時折私は、このいしなで山の地藏機に詣で、佐潟に生きた祖父を思い、父を思い、又佐潟の自然をこよなく愛した孤山先生を偲び、湧水の佐潟、汚水の流れ込まない佐潟、どうか何時迄も、この美しい自然の姿を残して置いて欲しいと祈るのである。	【風景】 【感情】
⑨-2	さて、私は赤塚出身の人間ではありませんが、亡き父の郷里ということで親戚もあり、たびたび訪れる機会があり、とくに佐潟湖の風景が好きです。	【感情】
⑩-9	湖面に映る優雅な角田山を眺めつつ曲線美の佐潟橋を足取りも軽く渡り、橋の中央の高い所で佐潟を展望すれば南向きのなだらかな緑の砂丘が湖畔迄続き、又松林が潟の畔りを囲むようにしている所に野鳥の観察小屋の屋根が葦原の中から見えてくる。	【風景】
⑭-1	近年佐潟の知名度が上がり、他所から訪れる人が多くなってきた。休日には駐車場が混雑することもある。バスで来られる方は「赤塚坂下」と「赤塚連絡所前」が近い。公園の木床部から景観を、野鳥を、或いは蓮華を、太鼓橋を渡って菖蒲を眺める人達が多い。潟の周辺を農道が通っているが、中年・老年の夫婦や仲間の散策姿もボツボツとある。自然に親しみ、体調づくりに最適である。	【風景】 【行為】
⑭-6	平成八年夏、蓮は異状なまでにふえた。潟や蓮と人間がわかわりあいを持っていた時と違う今、何かむなしい。	【風景】 【感情】
⑭-13	新潟砂丘は下通りから基盤整備が行われてきた。平成になって赤塚の板藤砂丘の高見が消えた。	【風景】 【遊び】
⑭-15	潟の周辺、ことに上端の塵芥は自に余る。最も美しかるべき御手洗潟が何と汚れて仕舞ったことか、神社や浄水に対する尊敬と恐れが薄らいだことは哀しいことだ。	【風景】 【感情】
⑮-5	今や新潟市に佐潟ありですね。世界の湿地・ラムサール条約に登録されたと聞くと、嬉しく思ふ。	【感情】
⑯-1	梅雨晴れの青空が広がる佐潟に爽やかな風が吹き渡って、立蓮の若葉も葉裏を見せ乍らさざ波のように揺れ動いています。新芽の繁っている葦原には葭切が頻りに鳴き競っていますが、冬の白鳥のいる佐潟も美しく素敵ですが、初夏の水辺にあやめの咲く佐潟も精気が溢れ出て大好きです。	【風景】 【感情】
⑰-9	国の減反政策で逐次潟田が放置され、結果的に新潟市が取得の上公園計画を進めているが、本来の潟普請が行われないまま、現在佐潟が終末的悲鳴をあげているといっても過言ではない。佐潟と周辺がその景観・機能を発揮持続出来る施策が必要である。	【環境】 【感情】

d) 人と潟の関係再構築期

住民4, 7, 9, 10, 11, 12, 17, 20, 24, 25, 27, 28の自伝的記憶を41件抽出した。その内容は、【風景】、【感情】、【生物】、【行事】、【詩歌】、【環境】、【行為】、【生業】、【生活】、【施設】、【その他】に関する言及であった。

先述したように、人と潟の関係再構築期には、潟での生産活動が減退し潟の現代的価値を見出す取り組みが行われた。住民の自伝的記憶からもこれらの事実が確認された。

1983(昭和58)年からは、佐潟公園の整備事業が行われ、それに伴い完成した佐潟橋や野鳥観察小屋(潟見鳥)が住民の自伝的記憶となる風景に写り込む(⑩-9)。また、1996(平成8)年のラムサール条約登録により佐潟の知名度が上がり、他所から訪れた市民が、公園化した佐潟周辺で野鳥観察や散策により自然に親しみ、体力づくりに励む様子(⑭-1)や、ラムサール条約登録を契機として自然と人間の関係性が取り戻されることを喜ぶ声(⑮-5)が抽出された。

一方で、都市化の進行や潟での生産活動の衰退により失われた風景もある(①-14, ⑭-6)。佐潟周辺の砂丘地帯では基盤整備により複雑な地形が失われ(⑭-13)、良好な環境が保持されていた潟の風景も失われた(⑭-15, ⑰-9)。60歳以上の世代からは、現代の佐潟の風景に対する愛着についての記述がみられた(⑨-2, ⑰-1)。この世代には、冬には白鳥が飛来し、夏になると水辺に菖蒲が咲く佐潟の風景が共有されていることが明らかとなった。

4. まとめ

(1) 結論

本研究では、新潟市の佐潟を対象として、会誌「越後赤塚」に掲載された住民の自伝的記憶を整理することで、住民の自伝的記憶から地域景観を読み解いて風景の持つ意味を議論することを試みた。

その結果、以下のような成果を得た。

- ・ 会誌「越後赤塚」より新潟市佐潟をとりまく住民の自伝的記憶を抽出し、「自伝的記憶分布図」により住民の自伝的記憶が形成される内容、時期、場所を概観できる表現方法を示した。
- ・ 住民の自伝的記憶から地域景観を読み解いて風景の持つ意味を議論できる可能性を示した。

(2) 今後の課題

本稿は資料より抽出した自伝的記憶について議論したため、世代ごとの記述数に差が見られるなどの不十分な

点がある。今後は、住民を対象としたヒアリング調査を行うことで、世代ごとに共有される景観に対する価値の差異等について検討する必要がある。

参考文献

- 1) 山崎亮：コミュニティデザインの時代，中公新書，2012.9
- 2) 山崎亮：コミュニティデザイン 人がつながるしくみをつくる，学芸出版社，2011.5
- 3) 篠原修編：景観用語事典 増補改訂版，彰国社，pp.10-13, 1998.11
- 4) 内山節：「里」という思想，新潮選書，pp.26-28, 2005.9
- 5) 日本認知心理学会編：認知心理学ハンドブック，有斐閣ブックス，pp.166-167, 2013.12
- 6) 佐々木葉・安達幸輝・外山実咲・橋本航征・渡邊拓巳・小澤広直：新潟市における潟をめぐる市民活動の特徴，土木計画学研究・講演集，vol.57, 2018.6
- 7) 新潟市：新潟市のあゆみ，2007.4
- 8) 新潟市：佐潟周辺自然環境保全計画，2014.3
- 9) 永井友梨・尾崎信・中井祐：住民に共有される記憶の調査に基づく町の同一性に関する考察，景観・デザイン研究講演集，No.7, pp.172-176, 2011.12
- 10) 上井萌衣・後藤春彦・吉江俊：東京下町に共有される地域の記憶とその伝承がなされる集団に関する研究—東京スカイツリー開発以前の世代がもつ下町像に着目して—，公益社団法人 日本都市計画学会 都市計画論文集，Vol.51, No.3, pp.1117-1122, 2016.10
- 11) 山口美緒・横張真・渡辺貴史：住工混在地域における居住者の心像風景の解明，都市計画論文集，第36巻，pp.745-750, 2001
- 12) 御厨貴：オーラル・ヒストリー—現代史のための口述記録，中公新書，2002.4
- 13) 後藤春彦・田口太郎・佐久間康富・早稲田大学後藤春彦研究室：まちづくりオーラル・ヒストリー—「役に立つ過去」を活かし、「懐かしい未来」を描く，水曜社，2005.4
- 14) 新潟市潟のデジタル博物館：佐潟 <http://www.niigata-satokata.com/learn/sagata/> (2018.8.31閲覧)
- 15) 本間隆平：ラムサール条約登録湿地 10 佐潟(さかた)，私たちの自然，No.496, pp.8-11, 日本鳥類保護連盟，2004.
- 16) 佐潟水鳥湿地センター：ラムサール条約湿地 佐潟—新潟市—，2016.3
- 17) 赤塚郷土研究会編：越後赤塚，創刊号，1982.10
- 18) 赤塚郷土研究会編：越後赤塚，第二号，1983.8
- 19) 赤塚郷土研究会編：越後赤塚，第三号，1984.7
- 20) 赤塚郷土研究会編：越後赤塚，第四号，1985.6
- 21) 赤塚郷土研究会編：越後赤塚，第五号，1986.5
- 22) 赤塚郷土研究会編：越後赤塚，第六号，1987

- 23) 赤塚郷土研究会編：越後赤塚，第七号，1988
- 24) 赤塚郷土研究会編：越後赤塚，第八号，1989
- 25) 赤塚郷土研究会編：越後赤塚，第九号，1990
- 26) 赤塚郷土研究会編：越後赤塚，第十号，1991
- 27) 赤塚郷土研究会編：越後赤塚，第十二号，1993
- 28) 赤塚郷土研究会編：越後赤塚，第十三号，1995
- 29) 赤塚郷土研究会編：越後赤塚，第十四号，1997
- 30) 赤塚郷土研究会編：越後赤塚，第十五号，1999.3
- 31) 赤塚郷土研究会編：越後赤塚，第十六号，2001.3
- 32) 赤塚郷土研究会編：越後赤塚，第十七号，2006.6
- 33) 赤塚郷土研究会編：越後赤塚，第十八号，2007.7
- 34) 赤塚郷土研究会編：越後赤塚，第十九号，2008.7
- 35) 赤塚郷土研究会編：越後赤塚，第二十二号，2011.7
- 36) 赤塚郷土研究会編：越後赤塚，第二十六号，2015.6
- 37) 赤塚郷土研究会編：越後赤塚，第二十八号，2017.6